

2013 vol.26 春号 源流からのたより

ぽたい

源流のひとしづく

祝 大滝ダム竣工 2013.3.23



CONTENTS

- ・10周年記念事業をふりかえって
- ・「源流学」①はじめに
- ・源流の主役たち
- ・鹿子木孟郎と吉野
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・水源地の森へ行ってみよう
- ・10周年写真ダイジェスト

森と水の源流館
 住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
 公益財団法人吉野川紀の川源流物語
 TEL 0746・52・0888
 FAX 0746・52・0388
 URL <http://www.genryuu.or.jp>
 E-mail morimizu@genryuu.or.jp

森と水の源流館この10年を写真でふりかえります



平成14年4/29
 テープカットならぬフジツルカットで開館



平成15年3/8
 水源地の森ツアーも好評



平成15年4/29
 1周年の記念講演は中本賢さん



平成16年3/11
 高原地区から森と水の源流館に
 フナがやってきた



平成17年4/29
 3周年には、カップ登場



平成17年11/5
 源流学の森に達っちゃんとみんなで
 手伝って建てた「源流の宿」完成

「10年」ありがとうございました
これからもよろしくおねがいします！

は
じ
ま
り
の
郷
、
は
じ
ま
り
の
十
周
年
。



平成18年4/29
 5周年には伝統の
 千本つきでお祝い



平成18年7/9
 いろいろ教室で、
 東熊野街道を歩く



平成19年11/4
 源流の森シアターが夜にコンサート会場に！
 河島翔馬さんとなかもとみゆきさん



平成20年9/7
 ボランティアさんと吉野川でゴミひろい



平成23年1/30
 御船の滝水溜ツアーの歴史上、一番の水溜に！



平成23年9/4
 台風12号で国道169号線が寸断！みなさんか
 らはげましの言葉をたくさんいただきました



平成23年4/29
 10周年でたくさんの人に
 来ていただいて、盛大な餅まき

源流人募集

源流人とは かけがえない水を生む
 源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは 集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、
 参加し、喜びを分かち合いながら、
 源流を守り、育ててゆこうとする会です

**ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間
 を紹介ください**

| | |
|----|---------|
| 個人 | 2,000円 |
| 家族 | 3,000円 |
| 学生 | 1,000円 |
| 団体 | 10,000円 |

年会費
 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金 にご協力ください

ありがとうございました。
 平成23年度、166,407円の森守募金をお預かりしました。
 奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学
 4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での
 斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。
 今後ともご支援をよろしくお願い致します。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

「表紙の写真：大滝ダムが3月23日に竣工しました。」

10周年記念事業をふりかえって

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局 尾上 忠大

平成14年度に森と水の源流館が開館。同年財団法人吉野川紀の川源流物語を設立し、平成24年度、おかげさまで10周年を迎えました。財団はこの節目の年に公益財団法人への移行を果たすことができました。これらを記念し、前号で紹介した「源流まつり」を含め、いくつかの記念事業を行いました。

森と水の源流館内の展示では、大規模リニューアルとはいきませんが、3階「川上村劇場」にて、子どもの目線で村を伝える約6分間の映像プログラムを導入。館内の映像プログラムや持出用教材映像などは、この10年間で少しずつ追加してきました。映像づくりの作業では、プロの力を借りながらも、開館当初には見えなかったテーマやメッセージ、そして私たちの立ち位置などが確認できる機会であることを今回も感じました。しっかりと考え、こだわった作品ばかりですので、まだの方はぜひ、映像プログラム10年間の蓄積を一度ご覧にお越しください。

4月29日に開催の森と水の源流館「誕生日の宴」と題した感謝祭では、250人を超えるご参加をいただきました。こ

れまでに出会ったたくさんの方々が、励みと駆けつけてくれました。また多くのメッセージを寄せていただきました。青空の下、ほんとうにうれしい気持ちになったことを今も思い出します。

「はじまりの郷(くに)」。はじまりの10周年をキャッチフレーズとして、取り組んだ一年でしたが、最も早くから準備にかかったのが記念講演会の事業でした。これは、同じ10周年を迎えた川上村立図書館との共同で行う事業であることから、前年度の寒い時期から教育委員会、図書館スタッフと打合せ・協議を重ねてきました。「十年目の発見! はじまりの郷(くに)」で【自然×歴史】複合フォーラム」と、いろいろな大人の事情と言いつつ、いろいろ大人気なイベントになりました。長いタイトルのつもりでしたが、果たして何が「十年目の発見!」だったのかと思ふと、すぐ



「誕生日の宴」(4月29日)フィナーレで行った「ごくまぎ」(もちまち)

隣にある図書館や教育委員会といっしょに今まで何も一緒にやってこなかった、ということが大いなる発見と反省でありました。

7月16日(奈良県山の日川の日)に、ネイチャーフォトグラファーの内山りゅう氏による講演会「日本の美しい水・川上村の自然の魅力」を映った清流の宝物」と、村内中興川で交流観察会を開催。内山氏には、これをきっかけに川上村とのつながりをもっといただき、8月には、BSフジ「小さな大自然」という1時間のハイビジョンテレビ番組で水源地の村や美しい川の様子を紹介いただきました。実はこの番組は、以前のフジテレビのニュース内で、益田由美アナウンサーが毎週全国の素晴らしい川を巡る「リバーウォッチング」というコーナーが原点です。いつかこのコーナーで吉野川源流を取り上げてほしい、そんなことをちよん10年前頃に、坂口前局長と話をしていたことが、気がつけば叶ってしまいました。

10月22日は、「古事記にうつる源流の郷」と題し、立正大学教授三浦佑之氏か

ら、はじまりの郷を考えるにふさわしいお話をいただきました。それぞれの講演内容は、森と水の源流館のホームページで詳しくご覧いただけます。

今だからつづやきますが、両講演会の会場となった森と水の源流館隣接の「やまぶきホール」は大きいホールで、人を集めることが、ほんとうにしんどいでしょう。しかしこのホールをいっぱいにして、半年以上あちこち走りまわりました。当方と教育委員会、図書館それぞれのネットワークをつなぐこともできました。単独の活動では、出会えなかったであろう人たちに出会わせていただき、励ましの声を直接かけていただける機会も多くありました。これがこの記念事業の大きな財産となって残りました。

ほかにも記念事業はありますが、誌面の都合、別の機会に置かせていただきます。ふりかえれば、あつという間の1年間でした。今年を生かすか、殺すかは今後次第だと思います。応援いただいた多くの人とのつながりを広げ、さらに新しい人と出会いたいと思います。10年目、いまだ道の途中。これからもよろしくお願ひします。



「内山りゅうさんと行く交流観察会」(7月16日)

吉野川紀の川しらべ隊

吉野川紀の川しらべ隊 「湿地の生き物をしらべよう」



3. イヨシロアブを襲うシオヤアブ

2012年7月15日に五條市の湿地を訪ね、吉野川紀の川中流域の里山周辺に広がる湿地の生き物を観察しました。特に今回は、奈良県特定希少野生動物植物に指定されているヒメタイコウチの観察をメインに行いました。講師には、日比伸子さん(NPO法人やまと自然と虫の会)、窪田敏さん(NPO法人五條のヒメタイコウチを守る会)を招き、6名の参加者で実施しました。

ヒメタイコウチは、中国・朝鮮・日本に分布し、国内では、香川県を西限、浜松市を東限とする近畿から東海地方で局所的に見られます。奈良県では吉野川中流部(大淀町・五條市)の限られた里山周辺の湿地に生息します。生息地はもともと局所的で、しかも山すそなど宅地開発などの影響を受けやすい場所であるた



1. ビオトープの湿地で観察の様子



2. ヒメタイコウチ



4. クヌギの木を足でけつたら、ミヤマクワガタが落ちてきました

今回は、ビオトープの観察をメインに行いましたが、たくさんの方々がヒメタイコウチが生息していることを確認しました。ヒメタイコウチは、水生昆虫ですが、水に浸かるとおぼれてしまうため、濡れた土の上などでたくさん見ることができました。これからは、生息地が人間の勝手な都合で壊されたりしないように、見守っていく必要があると感じました。

め、絶滅が危惧されています。奈良県では法令に基づき、採集を禁止し、五條市では、保護のため、ビオトープを作り、繁殖を試みるなどの取り組みが行われています。

今回は、朝、森と水の源流館に集合し、マイクロバスで1時間ほど移動し水源地の森の入口に到着です。その手前には、水源地の森管理棟があり、バイオトイレを設置しています。これは水を使わず、おがくずの中にある微生物のはたらきで、源流の水を汚すことなく汚物を分解するトイレです。川上村が源流の森を守る上でのこんなこだわりも紹介します。

水源地の森の入口では、山の神に安全を祈願し、出発です。行程は往復で15kmほど、高低差は50mほどです。保全のため、登山道を開発して歩きやすい登山道を造成するなどしていませんが、お世辞にもよい道と言えません。その分、本来の森の姿を体感できます。明神谷右岸の人工林の山道を進み、途中から左岸の水源地の森(キノコ又谷方面)

水源地の森に行ってみよう

水源地の森ツアーは、川上村が保全する「吉野川源流-水源地の森」(三之公天然林)を森と水の源流館がご案内するガイドツアーです。主な目的は、水源地の森の大切さを知り、身近な環境問題についても興味をもってもらおうことです。が、のんびりと楽しくリラックスしながら森を楽しむ、もっと好きになってもうことも大切に行っています。ここでは、まだ行ったことがない人のために、どんなツアーなのか少し詳しく紹介します。

行程は、朝、森と水の源流館に集合し、マイクロバスで1時間ほど移動し水源地の森の入口に到着です。その手前には、水源地の森管理棟があり、バイオトイレを設置しています。これは水を使わず、おがくずの中にある微生物のはたらきで、源流の水を汚すことなく汚物を分解するトイレです。川上村が源流の森を守る上でのこんなこだわりも紹介します。

水源地の森の入口では、山の神に安全を祈願し、出発です。行程は往復で15kmほど、高低差は50mほどです。保全のため、登山道を開発して歩きやすい登山道を造成するなどしていませんが、お世辞にもよい道と言えません。その分、本来の森の姿を体感できます。明神谷右岸の人工林の山道を進み、途中から左岸の水源地の森(キノコ又谷方面)

水源地の森ツアーってどんなの?

に入ります。このツアーは、どろんどろん歩いていく体力勝負のツアーではなく、ゆつくりと、時に立ち止まりさまざまな生き物を観察したり、そのはたらきについて学んだり、風を感じたりして進んでいきます。

いつも、お弁当を食べる場所になっている、通称アマゴポールという淵では、本当に美しい水の風景を見ることができ、ます。苔生す緑だらけの森の世界、倒れそうになっても、周りの木々の根で支えられ、何とか立っているトチノキの大木、岩の上という不遇な環境下でも頑張って根を張って生きているサワグルミなどを見て感動する参加者もいます。自然について学ぶだけでなく、自然とつながる中で、いろいろなことに気づけるのも面白いところです。

4時間ほどの行程を森で過ごして、森と水の源流館に戻って解散です。普段、都市部に住んでいても、自然の恩恵無しには生きていけません。材木、飲料水、工業用水、農業用水、空気、その他色々なものが森からの恵みです。そして、日本では森の多くが川の源流部にあります。ぜひ、水源地の森ツアーで森とつながってみてください。

平成25年度は4回(4/20・4/21・7/13・11/17)開催予定です。源流人会会員には参加費の割引もあります。定例ツアーの他、団体向けにも開催することができます。

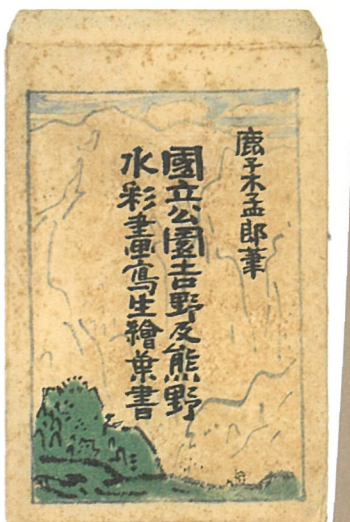
鹿子木孟郎と吉野

かのこぎたけしろう

大正時代、大台ヶ原などに開発の手が伸び始めると、一帯を国立公園に指定して保護しようとする動きが生まれまし。大正11年（1922年）の国立公園候補地調査を機に、昭和2年（1927年）に吉野郡町村長会による吉野国立公園期成会が発足、昭和6年（1931年）には、奈良県・三重県・和歌山県の3県合同の近畿国立公園期成同盟会が結成され、そして昭和11年（1936年）、現在の吉野熊野国立公園が指定されました。

阪電気軌道株式会社（近鉄の前身）は、鹿子木孟郎（1874～1941年）に、国立公園候補地の水彩画製作を依頼しました。鹿子木孟郎は、関西美術院長や帝展（現在の日展）審査員を努め、後進の育成にも力を注いでいた当時の画壇を代表する一人で、近年再評価が進んでいる洋画家です。

孟郎は昭和7年（1932年）に吉野（熊野）のスケッチ旅行を行い、昭和8年（1933年）1月、大阪三越の個展で水彩画60点を出品しています。その水彩画が「国立公園吉野及熊野水彩画生繪



第3図 絵葉書の包み紙

葉書」として印刷されました。絵葉書となった水彩画には「吉野の櫻花」「大峰山上喜蔵院宿坊前」「大峰山上の日の出」「大峰山上釣鐘岩」「吉野川上流」「吉野川不動窟」「大台ヶ原山中五色湯温泉附近」「大台ヶ原山中の溪流」「大台ヶ原大蛇窟」「紀州勝浦狼煙山上の眺望」「紀州鬼ヶ城」「海峽」などがあります。このうち川上村で描いたものは「吉野川不動窟」と「大台ヶ原山中五色湯温泉附近」で、「吉野川上流」も可能性があります。「吉野川不動窟」は、柏木の不動窟を吉野川から見上げた景色で、筏下りの様子が描かれています。「大台ヶ原山中五色湯

温泉附近」は大台ヶ原への登山道沿いの風景で、登山者の姿が描かれています。これらの形式は昭和8年2月以前のもので、また「大軌 吉野神宮駅 8・3・17」のスタンプが押されているので、昭和8年1月の個展前後に印刷、3月には流通していたことが分かります。絵葉書の包み紙には「国立公園吉野及熊野水彩画生繪葉書」とあります。指定は昭和11年（1936年）ですので、運動を盛り上げのため、敢えて「国立公園」の文字を入れたのかも知れません。



第1図 「吉野川不動窟」



第2図 「大台ヶ原山中五色湯温泉附近」

鹿子木孟郎の絵画は、その作風から大きく3期に分かれるとされています。晩年に当たる第3期は特に風景画に情熱を傾けた時期とされています。この変化が見られたのは昭和7年の吉野・熊野スケッチ旅行以降のことで、吉野・熊野の雄大な大自然に触れたことが契機となったのは間違いないことでしょう。

参考文献：『没後五十年 鹿子木孟郎展』三重県立美術館 1990

子どもたちに伝えたい「源流学」



今も変わらぬ神之谷集落

森 と水の源流館は、多くの人たちのご協力もあって開館から10年が過ぎ、この春で11年を迎えようとしている。この期間、わしはいろんな所で、山の暮らしや、山で学んだことを「源流学」として話してきたが、これからは次の世代を担う子どもたちに語っていききたいと思う。

源 流学とは、何も難しい学問ではない。吉野川（紀の川）の最初の一滴が生まれる村で、人と自然の役割について考え、行動し、その体験の中から、一人ひとりが答えを見いだしていくことである。暮らしが便利になればなるほど、日本人が自然（山村）とともに暮らしてきた知恵や工夫が失われていってしまうともいえるのである。

学 問を学ぶことは大事だが、机の上だけでなく、自然体験を通じて「何でだろう」と思ったり、「こうした方がもっと良いのかなあ」と考えたりすることはもっと大事だと思う。そのなかで子ども達は、自然やその地域に暮らす人たちが知恵や工夫を習得し、それが「生きていくための力」へとつながっていくとわしは考えている。

この連載では、山での暮らしや、川上村の郷土料理、受け継がれてきた祭りなど、わしの人生で経験したことをここで紹介し、その体験ができるように受け入れ態勢を考えたいと思う。体験といっても大げさなものではなく、自然の中の遊びの中で学んでもらえたらええと思っている。

先日、川上のことを学びながらボランティアをしていく「源流塾」という団体も立ち上げた。このメンバーたちと一緒に、子どもたちに伝えていく活動につながることを期待している。まずは、わしの自己紹介で



達ちゃん語る

子どもたちに伝えたい「源流学」①はじめに

もしようかと思うが、「ぼたり」を読んでいる人はわしのことをよく知っている人ばかりだと思う。この連載では子どもたちを中心に、今まで川上村のことを知らなかった人たちに、山のことを語っていききたいと思っているので、あらためて自己紹介をしたい。

わしは、昭和8年に川上村の柏木で生まれ、今年で80歳になる。15歳で山の仕事に入り、いまでも山と関わっている。川上村は田んぼがなかったから、食料も燃料も全部山の中にあっ。冬の貴重なタンパク源はウサギやキジなどで、自分たちでワナを仕掛けて獲って食べていたし、燃料もそれぞれの家庭で炭焼きをしていた。みんな子どもの時分から、大人の見よう見まねで、知恵と技術を身につけていった。

子どものころに体験したものは、自分の人生においても基本となった。いま災害でライフラインや食料が途絶えたとしても、山で暮らしていたら、何ともなる。しかし、その技術を知らなければ、急に山で暮らしはじめても、生活するのは難しい。技術を語る語り部がいな



木馬引きの様子（川端一弘氏撮影）

くなっているのが現状だ。当時、柏木は約100軒400人ぐらいが住んでいた集落だった。80年たったいま、この地域の人口は97人（平成25年1月現在）で、子どもはもうおらん。たった80年の間でこんなに変わってしまった。科学や進化も大事だが、いっぺん立ち止まって、今までどんな暮らしをしてきたのかを知って、また歩いていくのも大事じゃないだろうか。そのためにも「源流学」では原点に戻った考え方ができるような、心がけたい。



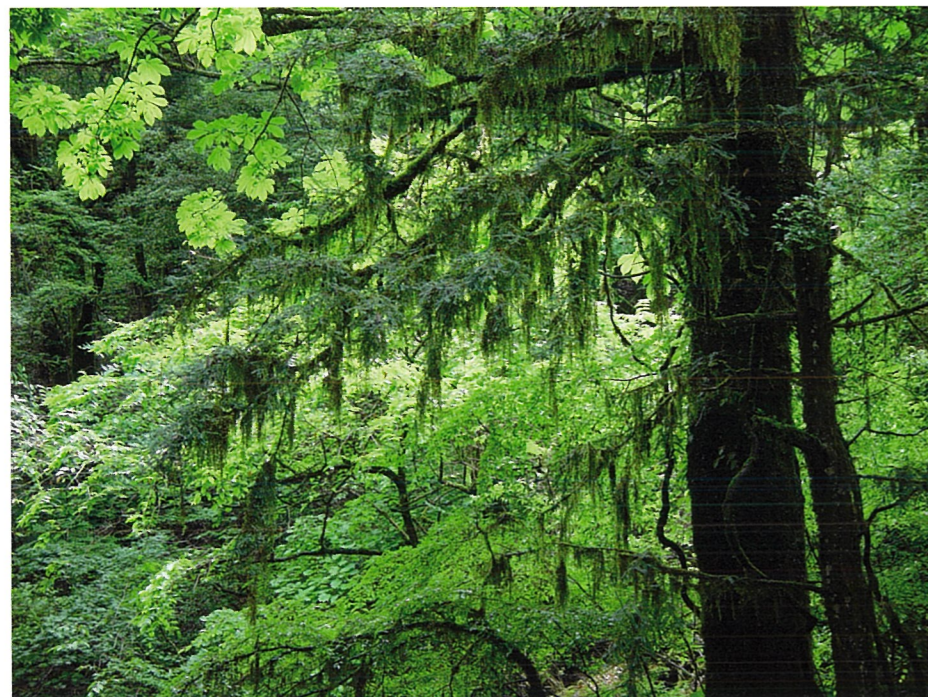
※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。



「吉野川源流一水源地の森」のコケのカーテン

川上村には、あちらこちらの溪谷沿いに樹木からコケが垂れ下がっています。今回は、「吉野川源流一水源地の森」での自然環境調査で、私たちが行った蘚苔類調査を元に、何が、なぜ、どのようにぶら下がっているのかについて、解説します。

木村 全邦



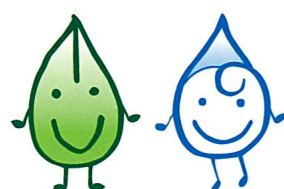
1. コケのカーテン

「吉野川源流一水源地の森」をはじめ、川上村の谷に入ると、樹木などからコケが時にカーテンのように垂れ下がって生えているのをよく見ます。それらの多くはハイヒモゴケ科の蘚類(コケ植物)です。ハイヒモゴケ科の仲間、東南アジアなど、熱帯、亜熱帯に分布の中心を持つグループで、その多くの種で日本が、分布の北限、あるいは北限近くにあります。

ところで、宮崎駿監督の映画「もののけ姫」の舞台のモデルとなった原生林は、屋久島(鹿児島県)の白谷雲水峡です。最近では、世界自然遺産にも指定された屋久島のエコツーリズムが盛んになり、屋久島の森を訪れる人も多くなりました。多くの方が、屋久島で苔生す景観に魅了されて帰ってきます。それに従って、屋久島の森に行った人が、川上村の森に来ることも多くなりました。そして、そういった時に、よく耳にするのが「屋久島の森の景観に似ている」「コケのある景色が屋久島みたい」という「景観」がよく似ているという言葉です。その理由が、この垂れ下がって生えるハイヒモゴケ科の蘚類が生育できるような共通した環境にあると思っています。

屋久島は日本では珍しい雲霧林^{うんむりん}として知られています。雲霧林とはその名の通り、霧のよくかかる湿度の高い森のことで、東南アジアなど熱帯、亜熱帯が本場で、屋久島はほぼ北限にあたります。このような森では、樹幹や岩をコケが覆い、深いところではコケのマットに手を差し込むと、ずぶずぶと腕が隠れてしまうほどコケに覆

れてしまうので、蘚苔林^{せんたいりん}(Mossy Forest)とも呼ばれます。赤道付近では、このようなゾーンは標高1500メートルから2500メートルあたりです。日本では南部の低山地帯がギリギリこのゾーンのコケが生きていける環境になります。川上村は、常に霧がかかるほどの溪谷はありませんが、このゾーンのコケが比較的良好な状態で観察できる、日本では希な環境を有しているところなのです。



ハイヒモゴケ科の蘚類は、平たく言うと、暖かくて、風通しのよい、湿度の高い溪谷沿いによく垂れ下がって生育しています。「湿度の高い」というと、じめじめした蒸し暑いというイメージを持たれるかも知れませんが、そうではありません。むしろ、夏に溪流沿いでたたくと、さわやかな風が川面を伝って頬を伝い、涼しくていつまでもいたくなるような環境にこのコケたちは生育しています。

なぜ、そんなところが好きなのかを説明します。コケ植物は根がないので、光合成に必要な水を体全体で吸収します。樹木に着生するコケは、地面に生えるより、光を受けるチャンスは広がります。しかしその分、水を得るチャンスを失います。それを克服する一つの方法は、乾燥に耐える手段、たとえば、乾くと仮死状態で耐えるなどの術を身に付けることですが、樹幹に着生する多くのコケはそのような手段を身に付けることをできなかったか、しなかったようです。夏でも涼しい溪谷沿いは湿度も高いため、水を得るのに好都合で、多くの種が集中します。さらに、空気中の湿度から水分を得やすい身体づくりは、空気中の様々な物質も取り込みやすくします。これが、植物の生長に必要な栄養分などならよいのですが、汚染物質なら大変です。そのため、これらのコケが生育するためには空気もきれいでなければなりません。それから、生まれは南の国なので、暖かいところを好みます。川上村の多くの谷では、この条件をすべて満たすので、多くの垂れ下がるコケが見られるのです。

ハイヒモゴケ科は日本で25種確認されています。このうち奈良県には13種、「三之公の吉野川源流一水源地の森」では7種が確認されています。絶滅の恐れのある種を掲載している「奈良県版レッドデータブック」ではコケ植物が扱われていませんが、近隣の他県にはほぼ同数の種数が確認されているにもかかわらず、三重県では2種、京都府、兵庫県ではそれぞれ5種がリストアップされています。つまり、北に行くほどめづらしくなり、生育基盤がぜい弱になっていくことがわかります。これらが生育しているというのは、温暖で、空気がきれいで、湿度が高いこと、つまりすばらしい自然環境を有していることの指標になります。この自然環境がかたち作るすばらしい景観とともに、ゆっくりとこの垂れ下がるコケも観察してほしいと思います。



3. タカサゴサガリゴケ



4. ヒロシノブイトゴケ(環境省レッドリストの準絶滅危惧種)



5. ソリシダレゴケ



6. コハイヒモゴケ



7. ミズスギモドキ

【参考文献】

兵庫県, 1995. 兵庫の貴重な自然-兵庫県版レッドデータブック-. 兵庫県保健環境部環境局環境管理課, 神戸.
岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物-コケ-. 平凡社, 東京.
京都府, 2003. 京都府レッドデータブック上巻: 野生生物編. 京都府企画環境部環境企画課, 京都.
三重県, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 植物・キノコ編. 三重県環境森林部自然環境室, 津.